

# 田中 俊平（たなか・しゅんぺい）

## 1、プロフィール

弘前大学教育学部在学中に友人からの刺激で文学に目覚め、教員として下北に赴任してから本格的に詩作に取り組み、「下北文化」を中心に活動し、詩集『青い墓標』を遺した。

<生没>

1948(昭和 23)年1月 11 日～1998(平成 10)年4月 10 日

<代表作>

『青い墓標』(昭和 47 年8月1日・ORA詩社)

<青森との関わり>

青森市に生まれ、弘前大学教育学部に学ぶ。大学卒業後、むつ市の小学校に11年間勤務して岩手県に転居。

## 2、作家解説

弘前大学教育学部在学中、「児童文化研究部」に所属し、先輩や仲間達に触発されて文芸誌「はまなす」に、処女作である「花道」という童話を載せる。

その後、同人誌「二十一世紀」に参加して童話を書いている。同人某が彼を表して「見ると、何も考えないで眠っているようでもあり、また、眠りながら何かを考えているようでもある」と紹介しているが、的を射ていると同意する仲間もいた。

昭和 45 年、小学校の教員として下北に赴任し、大学のサークルの先輩である竹浪和夫氏との交流が再開され、詩歌誌「オーロラ」創刊号に詩を書き、本格的な文学活動が始まる。本名の田中俊幸からペンネーム俊平に変えたのもこの時からであった。

「オーロラ」は2号から「ORA」に改題したが、1年近くの間は10号まで発行され、彼の詩も30編に達し、「ORA」で「田中俊平特集」が組まれるにいたる。

当初、詩歌誌の特集として編集されたが、昭和 47 年8月、詩人藤田勇三郎、恩師松井泰等に後押しされて活版の『青い墓標』を発刊することになる。そのあとがきに、文学を目覚めさせてくれた竹浪氏のことや「複雑な社会構造の現代においてこそ、人間は孤独を愛し、芸術を愛すべきだろう」と詩を書き始めた理由を書いている。

下北在住中に、月刊誌「春秋東奥」にも誌を発表している。

「ORA」が 14 号で休刊すると、秋元良治氏を中心に発刊準備をしていた「下北文化」を竹浪氏・渡辺悟氏と3人で編集を開始し、昭和 48 年2月に創刊号を発行する。

創刊号、2号、3号、4号、5号と詩を載せ、6号には随筆「自画像」で自らの少年時代を母の思い出と共に振り返り、現在に思いを致している。その後、7号、9号、13号に詩を発表しているが、13号は編集をほぼ一人で担当し、「(以後も)順調に発行していきたい」と編集後記に書いている。

14号(昭和 54 年 10 月)の詩掲載を最後に「下北文化」への作品掲載を終えている。

その後、昭和 56 年3月、11 年間の下北生活にピリオドを打ち、岩手県に転居する。後に、妻の実家の千葉に改姓し、社会教育主事等を務め、平成 10 年4月 10 日逝去する。享年 51 歳。岩手県下閉伊郡岩泉町立安家小学校校長在職中であつた。

### 3、資料紹介

#### ○『青い墓標』

図書

1972(昭和 47)年8月1日

190mm × 150mm

題材ごとに分類すると①海に関するもの②靈魂に関するもの③母に関するものの3本となる。中に1編だけ叙事詩の傾向の作品もある。あとがきに、「自信をなくした時、私は山を眺め、松井先生を思い出す。そして、弱い心に鞭うちながら筆を取る」とある。